

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュースレターNo.66（2019年12月号）◆

本研究所が主催いたしました会津八一博物館における「イメージの中の日本と中国の近代—ラップナウ・コレクションから—」はおかげさまをもちまして盛況のうちに終えることができました。ご来場の皆様にご挨拶申し上げます。年末の慌しき折、会員の皆様はいかがお過ごしでしょうか？ 今年最後の研究会となる12月21日は、中国映画芸術研究センター映画史学研究室副主任の李鎮先生の特別講演と、ディスカッサントに北京電影学院映画学学部教授の楊遠嬰を迎え、拡大研究会を予定しています。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】

会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いていますでしょうか。会員向けブログでのエッセイは回を重ね、第35回号にはインディアナ大学の黒宮広昭さんが「言論の自由とその危機」をご寄稿下さいました。これまでも国内外の多くの方から研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なされたい方は、原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

【第131回研究会】（10月19日（土）14時半から17時半）

・川崎賢子（立教大学）「映画とインテリジェンス 李香蘭ロシアン・コネクション再考」
1940年代のハルビン、上海、東京を拠点とする情報戦の関係者と李香蘭（山口淑子）の接触とその性質について、外交史料館から発掘した資料を紹介しつつ報告されました。

・田島奈都子（青梅市立美術館 学芸員）「観光地としての満洲～『旅行満洲』とポスターを中心として～」

『旅行満洲』復刻を手掛けた田島先生から、満洲を核として国内外（ヨーロッパまで）広がる観光網とポスターの意匠の転位、コンテクスト、制作にかかわった美術家の来歴など、総合的に報告していただきました。

11月研究会のご報告は、追って次号のニュースレターでお知らせいたします。

●12月以降の20世紀メディア研究会の開催予定は、12月21日（土）、2020年1月25日（土）、3月28日（土）、4月25日（土）に予定しております。研究会でのご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【コラム】

縁あって松本清張再読がマイブームである。一通り読んでるつもり、知ってるつもりではあったものの、私自身の趣味からすると典雅なる文体（by セシル・サカイ）の久生十蘭や、そこ知れぬペダントリーとナショナリズムの夢野久作や、狷介なまでに知的な中井英夫の文学世界の方に惹かれ、社会派推理はちょっと敬遠気味だった。

が、精読してみると、占領期の謀略事件取材した「日本の黒い霧」はいうまでもなく、朝鮮戦争期の報道検閲の中で起きた米兵の集団脱走事件を背景にした「黒地の絵」、犯人の音楽家がロックフェラー財団の招きで渡米予定とされていた「砂の器」など、ディテールが効いていて発見が多い。パンパンであったという GHQ 占領期の記憶を隠蔽するために罪を重ねる「ゼロの焦点」の悲劇も、好奇のまなざしにさらされるのではなく、誰にでも起こり得た悲劇として語られる。「良人がかつてパンパンと呼ばれた女性と一年以上にわたって同棲したことや、自分がその女とみくらべられたことに対する女主人公の潔癖な嫌悪感が、いささかも描かれていないのは片手落ち」（平野謙）という、評論家のジェンダーバイアス丸出しの言説が時代遅れのものになって読むにたえないのに対して、小説家の言葉はいまだに生命を失っていない。

[12月1日付 文責：川崎賢子]